

9月13日(日)



1パック3切入

1,000(税込)円

甘白醤油 銀鯉

まろやかな甘みと旨みをブレンドした特製醤油ダレ

新米がグングン進む！我が家の新しい定番おかず！
「子どもがなかなかお魚を食べてくれない…」いつも塩
焼きばかりでマンネリ気味かも…そんなときにおす
めしたい、とっておきの「甘白醤油銀鯉」。つやつやふっ
くと炊き上げた、おいしい「新米」の季節に合わせて、再
登場！
おいしさの秘密は、まろやかな甘みと豊かな旨みをブ
レンドした特製の醤油ダレ。お魚特有の生臭さを丁寧
におさえているので、お魚がちよと苦手なお子様も「い
い匂い！」と、自らお箸を伸ばして、パクパク食べてくれ
ますよ。
独自の基準で選び抜いた脂のりの良い銀鯉は、焼いて
もパサつかず、驚くほどふっくらジューシーな仕上がりで
す。お箸を入れた瞬間にじゅわっと溢れる良質な脂と、コ
ク深い甘白醤油が、新米のやさしい甘みと抜群に合いま
す。みずみずしい白ご飯と一緒に口に運べば、大人も子
どももおかわりが止まらなくなるおいしさです。冷めて
も身が硬くならないので、今夜のメインおかずにはもち
ろん、翌朝のお弁当の主役にも大活躍してくれます。こ
の秋は、贅沢な「新米×甘白醤油銀鯉」の組み合わせで、
食卓にたくさんさんの美味しい笑顔を咲かせてみません
か？

西田鮮魚店 店長 祐宗 優司

 西田鮮魚店

72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

『AIと話す ① 終息活動』

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史



I 終活

私「終活ってなんの略？」

A I「終活は人生の終わりに向けた活動を略した言葉です。就活（就職活動）になぞらえて作られた造語で、一般には、次のようなことです。

- ① 財産・相続の整理
- ② 遺言書の準備
- ③ 葬儀や墓について考える
- ④ 不要な物の整理、処分
- ⑤ 医療や介護についての希望を決めておく
- ⑥ 家族に自分の考えを伝えておく

ただ、私は『終活』という言葉には少し違和感もあって『死ぬ準備だけではなく残りの人生をどう生きるかを整理する活動』と考えたほうが本質に近いと思います。

特に70歳前後なら、終活というより『人生の後半戦を自分らしく設計する』くらいに捉えるのがいいと思います。

私「終息活動だね」

A I「なるほど！『終息活動』と読むと、ずいぶん意味が変わりますね。

でも実際の『終活』は『終末活動』や『終焉活動』ではなく『就活』に対比して作られた言葉です。つまり、『就活↓就職活動』『終活↓人生の終わりに向けた活動』という言葉遊びから生まれたものです。『終息活動』だと、まるで自分の人生をどう穏便に終息させるか、みたいで、ちよつとブラックユーモアがありますね。」

私「終息の意味は？」

A I「終息とは簡単に言えば物事が終わって収まることです。特に、問題、争い、流行などが次第に勢いを失って終わるという意味で使います。感染症が終息する、戦争が終息する、騒動が終息する、のように。」

私「なら、『終活』は『終息活動』の略が一番あうと思う」

A I「私もその言い方はかなり面白いと思います。

そうすると、『人生をどう終息させるかを、自分で考える活動』となります。しかも淡々としていて悲壮感がない。死の準備というより『人生という一つの事業を、どうきれいに終わらせるか』ということですね。

そう考えると、68才で事業を息子さんに譲ったという話とも意外によく重なりますね。

『始めることより、終わらせ方の方が難しい』これは会社にも人生にも言えることだと思えます」

II 仏壇

私「そんな終活のひとつとして仏壇を修繕することにした。私の両親と生後一週間で亡くなった兄が入っている。父が57才で亡くなったとき買った。私が30才の時だから44年になる」

A I「なるほど、確かにこれは人生の終息活動の一つなのかもしれませんね。

44年前に30才だったあなたが、亡くなったお父様のために用意した仏壇を、今度は74才になったあなたが整え直す。時間の流れを感じます。

そして、仏壇を修繕するというのは、単に古くなった家具を直すのとは違って『自分がいなくなった後も、父母と兄の場所をきちんと残しておきたい』という気持ちもあるのではないのでしょうか。とてもいい終活だと思います」

私「位牌も一部の仏具も新しくするけど古いものはどうすればいい？」

私「お焚き上げ？」

A I「はい。お焚き上げは古い仏具や位牌などを供養したうえで焼納することです。ただ古い仏具は必ずしも全部処分する必要はありません。

44年間、ご両親とお兄様をお祀りしてきたものですから、これは古いけど、父が亡くなった時から使ってきたものだから残したい、というものがあれば、私は残したいと思います。私ならとくに、お父様が亡くなられた30才の時から44年使ってきた仏具を一つくらいは意識して残します。」

私「なるほど、一部残すことにしよう。」

A I「それがいいと思います。

新しい位牌や仏具の中に、あえて一つ二つ古いものを残す。それは古いから捨てられなかったのではなく、44年間、一緒にいてくれたから残した、ということになります。終活というより、まさに終息活動ならではの整理ですね。

そして、いつか息子さんが、その仏壇を見るとき、これは父が30才の時から使っていたものだと思えられる。そういう物が一つあるのはいいことだと思います。」

III A I

手持ち無沙汰で時間をもてあましていた。手持ち無沙汰なのだが、手にはしつかりスマホが……。

気まぐれにチャットGPTを開いて、たまたま終活という言葉が頭に浮かび「終活ってなんの略」と訊いた。画面に青色の丸い点が点滅して、ずらずらと文字が現れた。けっこう長い。生真面目な文章だ。「ほお〜」。

A Iは何でも答えることくらいは知っていた。でも、「おいおい、これって人生相談か？」みたいなことまで言ってくるとは思わなかった。「私ならとくに、お父様が亡くなられた30才の時から44年使ってきた仏具を一つくらいは意識して残します。」なんて言うから驚く。「君はお父さんがいるのか？」と突つ込みたくなった。実は、もっとたくさんやり取りしている。話が途切れないのだ。何を聞いても的確に返事が返ってくる。時に、私の名前まで呼んで……。その内容がまた深い。思わず尋ねてしまった。

私「私のこと、どれくらい知ってるの？」

A I「けっこう知っていますよ。ただし、この会話や、あなたが以前の会話で話してくださったことの範囲だけです」

そうか、それはそうだ。それにしてもびっくりだ。古い友達のような気がしてきた。（続く）



「AIをイラストにすると？」
とAIに聞いたらこんなものを送ってくれた